

受付番号

11-009

留学・研究計画書

氏名	大坪 加奈子	留学機関名	シハヌーク仏教徒大学
留学先国名	カンボジア王国	留学期間	西暦 2012年4月～2013年3月
研究テーマ カンボジア農村における寺院の社会開発活動—僧侶と地域住民の相互作用をめぐって—			
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)			
<p>(研究の背景と目的)</p> <p>本研究の目的は、カンボジア農村における寺院の社会開発活動について人類学的見地から検討することである。具体的には、①寺院の社会開発活動を明らかにし、②それらを取り巻く社会背景・系譜を辿り、③文化的脈絡をもつ日常の中で紡がれる僧侶と地域住民の相互作用について明らかにする。</p> <p>近年、オルターナティブな開発や内発的発展における地域開発の担い手として寺院や僧侶が行う種々の活動が注目されてきた。開発政策における潮流の中で、経済開発から社会開発や人間開発へと重点が置かれるようになり、僧侶の多様な開発活動は仏教思想に基づく文化や伝統に根ざした活動として期待されている。開発活動に従事する僧侶は「開発僧」と称され、タイを中心として研究が進められている。カンボジアではタイにおける研究の流れを汲み、開発研究者や援助実務者によって著名な「開発僧」の活動に関しての事例報告がなされてきた。しかし、カンボジアを代表する「開発僧」以外の個々の僧侶の実践レベルでの実証的研究はほとんどなく、先行研究の多くが「開発僧」の思想や活動に終始し、地域住民が着目されることはなかった。僧侶と地域住民がどのような形で関わり合い、どのような手続きを経て活動が為し得るのか、それらが地域住民の日常生活の文脈の中でどのように位置付けられているのか、という点を考慮しなければ、この本質を見落とすことになりかねない。寺院は僧侶なしでは成り立たないが、同様に寺院を運営する寺委員会を始めとする僧侶を支える地域住民なしでも成り立たない。僧侶は厳しい戒律を保持しており、手足となって動く地域住民の協力が必要不可欠である。さらに、活動資金源は地域住民の寄進によるものであるため、両者は不可分の関係の中で現実を生きている。そのため、「社会変革の担い手」という言説を借りて、一部の僧侶の活動に光を照らし、理想像とする「開発僧」の条件を作り上げるのではなく、生きている人々の多元的現実と照らし合わせながら、現在進行形で繰り広げられている僧侶と地域住民の営みに焦点を当てる必要がある。</p> <p>(研究の意義)</p> <p>カンボジアにおける「開発僧」に関する研究については蓄積が乏しく、また長期的フィールドワークに基づく研究は皆無であるといった状況である。そのため、長年にわたって現地調査という選択肢が閉ざされていたカンボジアにおける上座仏教の動向研究においても学術的意義があるといえる。また、論者によって、あるべき「開発僧」の姿の条件が構築され、またある時は「寺院は人々の余剰を奪うものである」と考えられることから、寺院の役割や活動を動的に捉え、それが人々の日常生活の文脈の中でどのように位置付けられているのかを明らかにすることは、現地の視点に寄りそった開発援助の在り方、外部者の関わり方について問い直すものである。</p>			

成果報告書

記入日 2014年 1月 18日

氏名	大坪 加奈子	留学先国名	カンボジア王国	所属機関	王立プノンペン芸術大学
研究テーマ：カンボジア農村における寺院の社会開発活動—僧侶と地域住民の相互作用をめぐって—					
留学期間	2012年 8月 ~ 2013年 12月				
<p>0. はじめに</p> <p>本研究の目的は、カンボジア農村における寺院の社会開発活動について文化人類学的見地から検討することである。歴史的背景も含めた地域を総合的に捉えた上で、僧侶や寺院が行う活動を社会開発という視点から考察する。未だフィールドノートや集められた膨大な資料を十分整理できていない状況ではあるものの、現段階での調査の概要と得られた成果について報告したい。</p> <p>1. 調査の概要</p> <p>1.1 フィールドワークまでの道のり</p> <p>当初、調査期間を1年としていたが、前国王の崩御に伴い、宗教省からの調査許可取得に時間を要したことから、助成期間が過ぎた後も2013年12月まで調査を継続した。調査許可取得に際しては、日本大使館からの身分証明に関する書類を取得後、留学先大学の所属証明書、研究計画書を宗教省に提出し、調査許可を申請した。許可取得には約3ヶ月を要し、その間は首都プノンペンでの資料収集や短期での農村訪問を行った。調査許可取得後、2012年11月からカンボジア南東部に位置するスヴァーイリエン州の州都に滞在し、州宗教局への調査趣旨説明と協力依頼を行い、宗教局職員の協力を得て各郡の寺院を訪問して調査地を決定するための簡単なインタビューを行った。州都滞在中は大学の受け入れ教員から紹介された家庭で住み込みをしながら調査を行った。その後、元僧侶が寺院内にNGOを設立して活動している寺院が位置するロミアッハエツ郡のムリアム区を調査地とした。NGO職員の家に住み込み、寺院内のNGOでインターンをしながら寺院とNGOの活動の調査を行った。しかし、当該区は州都からバイクで約1時間を要する上に悪路であるため急病の際に病院へ行くことが難しいこと、また、身の安全確保が難しかったことから長期滞在が困難であると判断し、ムリアム区滞在から一ヶ月後に州都に戻り再度調査地を選定することとなった。各郡の寺院を再び訪問し、最終的にスヴァーイチュルン郡のクラオルコー区を調査地とした。クラオルコー区には4つの寺院があり、その中でKK寺を主たる調査対象寺院とし、KK寺の位置するTL村のアチャートム（儀礼を先導する人）の家に住み込みながら調査を行った。TL村での滞在に際しては、宗教省からの調査許可書を持参し、村長、区長、区の警察署を訪問し、調査と滞在への協力を要請した。その際、区長により調査許可書が発行され、区の警察署からは短期居住証明書が発行された。区内でも強盗が頻繁に生じており、警察と住み込み先の家主からは、区内の寺院でも遠く離れている場合は一人で行かないこと、日没までに帰宅することなどの忠告を受けており、夜間の儀礼への参加を除いてそれらの忠告を守るよう務めた。</p> <p>1.2 調査内容</p> <p>クラオルコー区での住み込み調査を開始後、2013年4月から5月にかけては、TL村で開催される仏教儀礼に数多く参加し、寺委員会やTL村の人びととの信頼関係構築に努めた。その後も12月の調査終了までの間、時間の許す限りTL村や隣接するPN村で開催される仏教儀礼での参与観察を行った。また同時に、僧侶</p>					

や寺委員会の組織、寺院内に住まう人びとについて把握しようとした。7月には5年に一度の国政選挙が実施され、選挙キャンペーン期間中にはクラオルコー市場への野党党首訪問があり、国道1号線が参集車で埋め尽くされるという事態となった。州の僧侶会議においても僧侶に対して与党への協力要請があったことから、政治と僧侶との関わりについて関心をもち、選挙をめぐる僧侶らの対応、ラジオで放送された宗教省の声明文についての情報を収集した。選挙後も与党が勝利したという結果を不服とする野党支持者のデモが行われるなど、プノンペンでは混乱が続いた。クラオルコー区では区内でデモを実施するのではないかと懸念がかけられて寺院内に兵士が駐留することとなり、調査の実施が困難であった時期が8月から10月頃まで続いた。10月からはプチュムバン儀礼や村落の歴史、土地所有、生業に関する聞き取りを行い、人びとの生活全体を把握しようとした。それと平行し、いくつかの世帯を抽出して家計調査も行った。12月にはスヴァーイチュルン郡の寺院の活動の全体像を把握するため、全寺院を訪問して簡単な聞き取り調査を行った。

2. 調査地の概要

2.1 調査地の現況

スヴァーイリエン州の州都はプノンペンから国道1号線を南東方向へ伝って122kmに位置し、隣接するプレイヴェーン州ともに土地が低く平野で肥沃なデルタ地帯を形成している。ヴェトナム領土に大きく突き出しているため州境のほとんどがヴェトナム国境と接している。クラオルコー区はプレイヴェーン州との州境に位置しており、国道1号線沿いを中心として市場や集落が発達している。クラオルコー区のクラオルコー市場はスヴァーイチュルン郡の商業の中心である。スヴァーイチュルン郡はヴェトナム国境と接しているため、クラオルコー市場ではヴェトナムからやって来た人びとが、野菜や果物、衣料品、日用雑貨などの販売や卸を行っていた。クラオルコー区の人口・家族数についての区の職員からの聞き取りをまとめたものが以下である。

クラオルコー区の各村落の人口・家族数

	村落名	家族数	人口	
			合計	女性
1	TL	401	1,535	766
2	PN	341	1,518	778
3	KK	197	871	456
4	KL	191	852	428
5	BS	164	754	367
6	KC	295	1,295	672
7	BT	242	984	504
8	BC	239	1,005	499
9	RC	315	1,285	649
10	RT	112	461	207
11	PK	188	745	381
12	PT	155	673	351
13	RT	114	523	282
	合計	2,954	12,501	6,340

生業の中心は稲作であり、人びとは天水に依存した稲作に従事している。近年、高収量で発育が早いIR種を販売用に栽培する農家もわずかに現れているが、一期作が主であった。降雨の状況によって時期が異なるものの、調査時には直播きの場合は6月から7月にかけて散播し、田植えの場合は6月から8月にかけて苗代作りと田植えが行われていた。田植えよりも直播きが一般的であり、田植えを行う場合は所有する稲田の大半は直播で行い、一部を田植えによって行うという方法がとられていた。稲刈りは11月から12月にかけて行われていた。作付けされる品種については早稲・中稲・晩稲があり、早稲であるプカールムドゥオールという品種が特に好んで栽培されていた。プカールムドゥオールは自家消費米としても栽培するが、販売しても高値で買い取られるという理由で好まれていた。稲作以外にも人びとは住居の周囲に果樹や草木を植え、食用、販売用、薪木、薬草といったさまざまな用途に用いていた。その他、牛（もしくは水牛）、豚、アヒル、鶏と

いった家畜の飼育も一般的であった。雨季は魚が非常に豊富であり、自家消費または販売用に池や稲田での漁業が盛んに行われていた。その他、建設現場や縫製工場で働くためにプノンペンや他州へ出稼ぎに行く者が多く見られた。近年では海外へ出稼ぎが増加しており、特に韓国へ出稼ぎを志望する若者が多かった。クラオルコー市場には韓国へ出稼ぎの試験対策用の語学学校が開講され、生徒の内の数十人が合格して韓国へと旅立っていった。給与はプノンペンでの出稼ぎと比べるとかなりの高額で 1,000 ドルから 3,000 ドル程度であった。韓国に子どもを出稼ぎに出した者は「金持ちになる」ということが保証されており、周囲からも羨望の眼差しで見られていた。そのため合格するまで何年も勉強を続ける若者も少なくなく、韓国は若者にとって最も魅力的な出稼ぎ先であった。

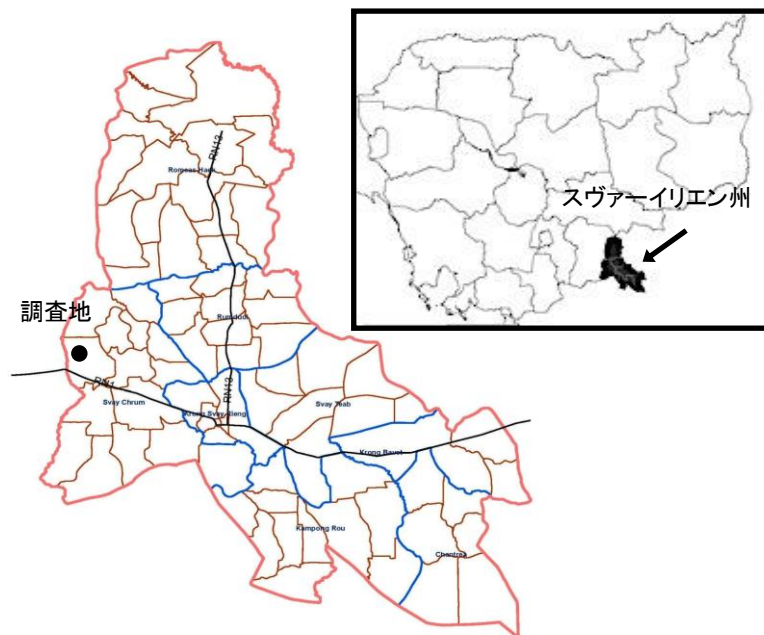


図 スヴァーイリエン州と調査地の位置

2. 2 調査地の歴史

寺院建立にまつわる説話によると、少なくとも約 200 年前には TL 村周辺には集落が存在していたとされる。クラオルコー区での大きな出来事としては、ロン・ノル時代に米軍からの大規模な空爆があり市場を始めとして大きな被害を受けたことがあげられる。トランセーと呼ばれる防空壕が村の至るところに建設され、爆撃の際にはトランセーに避難したという。その後、1975 年にポル・ポト時代が始まると、「教育」のために約 600 人の男性がコンボンチャーム州へ連行させられた。そこで、1ヶ月から 3ヶ月の間、田植えなどの農作業に従事させられた後、それぞれ帰村しサハコー（人民を管理するための末端組織）に所属した。そして、KK 寺の僧侶は全て還俗させられ、寺院内にはサハコーの事務所や病院が置かれた。基本的に男女別に集団生活をしながら灌漑の建設、稲田の耕作、家畜の世話、ござ作りなどの労働に従事させられた。結果として、虐殺、飢餓、病気や栄養失調などの要因も含めて多くの人びとが亡くなったとされる。1979 年、ヴェトナム軍が国境を越えて侵攻するとヴェトナム国境に近いこの地域は早い時期に解放され、生き残った人びとはそれぞれの自宅へと戻り生活を立て直していった。ポル・ポト時代に直接・間接的に虐殺に加担した村人の何人かは怒り狂った村人からの報復にあい、殺害されたという。報復を恐れてプレイヴェーン州側に逃れて定住した者がいたが、現在では TL 村の儀礼に参加するといった村人との交流が行われている。当人のいないところで「ポル・ポト野郎」と呼ばれていたものの、公の場で当時のことが語られることはなかった。

2.3 調査地における仏教の素描

宗教局の2013年の資料によると、スヴァーイリエン州にはマニカーイ派という在来派の寺院が240あり、1,607人の僧侶が止住している。州のサンガ組織は大まかに述べると、州僧長-郡僧長-住職から構成されており、政府の行政組織とパラレルになっている。全国・スヴァーイリエン州の過去4年間の寺院数・僧侶数の変遷は次の表の通りである。次の表には載せていないが、1999年からのデータと併せて概観すると、スヴァーイリエン州では着実に増加していた僧侶数が2009年より減少に転じて2010年に一旦増加した後、再び減少傾向にある。一方で、寺院数は全国・スヴァーイリエン州ともに増加し続けており、スヴァーイリエン州では廃寺となった寺院はない。僧侶が減少した場合や全くいなくなった場合、人びとは他の寺院から僧侶を招聘し、寺院を何とか維持しようとしていた。寺院は伝統だからそこに存在しているのではなく、地域の人びとが必要だと感じているから存在しているといえる。

全国・スヴァーイリエン州の寺院・僧侶数の変遷

	2010		2011		2012		2013	
	スヴァーイリエン	全国	スヴァーイリエン	全国	スヴァーイリエン	全国	スヴァーイリエン	全国
寺院数	235	4,466	236	4,522	236	4,553	240	未調査
僧侶数	2,049	56,304	1,795	56,788	1,626	53,314	1,607	未調査

郡別の寺院基礎情報は次の表に示している。調査地であるスヴァーイチュルン郡は州内で2番目に寺院が多く、僧侶数では最も多い。ドンチーは俗人の女性修行者、ターチーは俗人の修行者を指している。しかし、実際には修行者でなくとも寺院に止住している場合があり、多様な実態が窺える。

スヴァーイリエン州の郡別の寺院基礎情報(2013年)

	郡名	寺院	比丘	沙弥	合計	ドンチー (女性修行者)	ターチー (男性修行者)	学生	寺子
1	スヴァーイリエン(州都)	15	103	138	241	47	1	83	11
2	バーヴェット	18	61	91	152	9	1	18	26
3	スヴァーイチュルン	49	125	268	393	10	21	47	15
4	ロミアツハエツ	52	148	140	288	21	13	5	7
5	コンボンロー	39	112	61	173	3	0	10	28
6	スヴァーイティアツプ	21	88	64	152	14	5	6	21
7	ルムドウオル	31	48	69	117	4	3	5	19
8	チャントリア	15	49	42	91	18	1	10	32
	合計	240	734	873	1,607	126	45	184	159

クラオルコー区の寺院・僧侶・止住者基礎情報は次の表の通りである。4つの寺院があり、その内の2寺院は90年代以降に建設された新しい寺院である。僧侶の「貸し借り」があり、頻繁に移動を繰り返すため、僧侶数は一定ではない。僧侶の「貸し借り」というのは、移動や還俗により僧侶が減少した際に他寺院へ一時的に僧侶を派遣する行為である。KK寺とBR寺では住職間の関係が良好であったため、互いの要請に応じて両寺院間の僧侶の移動が頻繁に見られた。その他、年中仏教儀礼での一時的な僧侶の招聘というのは一般的に行われていた。

クラオルコー区の寺院・僧侶・止住者基礎情報(2013年10月)

	寺院名	所在地 (村落名)	建築年	仏教学校の 有無	比丘	沙弥	合計	ドンチー (女性修行者)	ターチー (男性修行者)	教師 学生他	寺子
1	KK	TL	1800	○(初等)	1	6	7	0	0	5	3
2	TL	TL	2009	×	5	9	14	(2)※	1	0	0
3	BR	BC	1735	×	1	9	10	0	0	1	1
4	MR	KC	1993	×	4	5	9	0	0	0	0
	合計				11	29	40	(2)	1	6	4

※ 雨安居のみ止住

3. 仏教による公共の福利

3. 1 「仏教と社会」による州内のサンガ・信徒ネットワーク

各寺院は位置する区や郡を越えて州内の寺院と相互に協力するネットワークを有していた。それに一役買っていたのが、州都の PC 寺内に事務所をもつ「仏教と社会」という団体であった。州僧長を代表とし、PC 寺の右読経師（実質上の住職代理）が活動を管理し、州の宗教局長も参与するという公的にも承認された団体であった。活動内容としては、ラジオ放送、マイクロクレジット（ロミアッハエツ郡のみ）、公立小学校での仏教・道徳教育がある。その中でも、ラジオ放送が主たる活動であり、スヴァーイリエン州の放送局から月曜日から日曜日まで毎日放送が行われていた。日曜日は生放送となっており、リスナーのあらゆる質問に僧侶が答えるという内容であった。日曜日以外は各地の仏教儀礼で録音された説法が中心だが、環境や衛生教育などの幅広い内容が放送されていた。報告者が調整役となって応急手当のワークショップを実施し、その様子を放送したこともあった。その他、宗教省やサンガの大管僧長からの公的な声明文の発表や各寺院からの仏教儀礼への参加の呼びかけにも広く利用され、垂直的・水平的な関係性をつなぐことに寄与していた。これらの活動資金は全て信徒による寄進によって成り立っており、寄進をするとラジオ放送の最後に名前と寄進額が読み上げられる仕組みとなっていた。「仏法の普及に寄与することは大きな功德になる」との説明がなされており、それが資金を獲得する大きな原動力となっていた。クラオルコー区の寺院でも年中仏教儀礼の際には、ボランティアが寺院内で台帳を広げて寄進を募り、僧侶や参集者は「仏教と社会」へ寄進していた。寄進した人びとは自分の名前が放送されるのを心待ちにしており、功德を積む楽しみ、聴く楽しみ、参加する楽しみが得られるという点が信徒を惹き付け、信徒が団体の活動を支援し続ける要因になっていた。

3. 2 村落レベルでの寺院の社会サービス

寺院の運営は、アチャーと呼ばれる儀礼を先導する人と選挙で選出された寺委員会の人びとによって行われていた。寺委員会は儀礼の執行、村人への連絡、建設のための資金の管理といった役割を担っていた。寺院はさまざまな社会サービスを提供しており、KK 寺での一例をあげると、ワゴン車の利用、火葬場の利用、遺体を運ぶ車両の貸出し、儀礼で使用するゴザや仏画の貸出しなどがある。KK 寺のワゴン車や遺体を運ぶ車両は、信徒らが遠方の仏教儀礼に行く際に頻繁に利用された。それらは信徒の寄進を集めて購入した寺院の所有物であり、公共物であった。調査時には寄進によって集められた資金で前述の遺体を運ぶ車両が購入された。車両の利用には燃料を要するため、仏日の儀礼後に寺委員会と信徒の話し合いによって運用方法や利用料金などのルールが決められた。しかし、実際には貧しい人びとには無料ないし安くするといった「例外」を認めて緩やかに運用されていた。このように、寺院の社会サービスは僧侶のみならずアチャー・寺委員会や信徒といったさまざまな他者との関わりの中で行われており、人びとはサービスの提供者であり利用者でもあった。

3. 3 僧侶個人としての「支援」

僧侶、特に住職は地域の中でも頼れる存在であり、住職個人の判断で困窮者を支援するということがなされていた。例えば、BR 寺の住職は信徒に対して個人的に金の貸し付けを行っていた。住職との関係性によって無利子にするか有利子にするかが判断されていた。以前、2,100 ドルを貸したものの当人は死亡してしまい、その子どもらも返済しないという出来事があった。子どもらは寺院に参詣に来ても住職と目を合わせないようにしていたという。それを聞いた報告者が「借用書を作成すれば返済するのではないか」と述べると、住職は「そういうものはいらない。返済できなかつたらもっていけばいい。慈悲だ」と語った。住職の年齢は 50 代だったが「ロークター（おじいさんに敬称をつけたもの）」という愛称で親しまれ、その性格は「心が広い」と形容されていた。他にも住職は寺院のすぐ近くに住む貧しい女性のために家を建築し、病院の治療費を支援していた。貧しい男児がいると出家をさせて勉強の機会を与えていたため、BR 寺にはまだ幼い沙弥の出家者が数多くいた。また、KK 寺では大きな儀礼が開催される際には多くの人手が必要となり、村の貧しい女性が「皿洗い」として雇われていた。皿洗いをする 2 名の女性は夫がおらずまた稲田をもたなかったため、皿洗いとして住職に呼ばれてその返礼を生活の足しにしていた。このように寺院の仕事を手伝い、その返礼として住職から金銭や物品を受けるという行為はさまざまな場面で頻繁に見られた。

3.4 一時的ないし永続的な避難場所としての寺院

先行研究では、出家は社会的地位を上昇させる手段であるとの分析がなされてきた。クラオルコー区においても、家が貧しく勉強を続けるために僧侶となり、村の寺院で仏教教育を受けた後にプノンペンに寺院に移動して大学へ通い、卒業後に還俗するという事例は多く見られたが、その他にも出家には多様な背景があった。すなわち、今後の人生の見通しが立たない者、離婚して人生に疲れて出家した者、麻薬を絶つために出家した者、精神的に疲れて出家した者など、出家理由は各人の人生をそのまま反映させていた。出家するということは、世俗から逃れて一時的ないし永続的に寺院という場に避難するという側面を持ち合わせていた。また、僧侶のみならず俗人に対しても同様のことがいえる。KK 寺には俗人男性 3 名が住職の許可を得て止住していた。妻子に逃げられて行き場を失い住み着き始めた者、妻の死後に僧侶の運転手をしながら止住する者、精神的な病を煩って寺院の手伝いをしながら止住する者がいた。戒律を保持する者はおらず、彼らは厳密な意味での修行者ではない。しかし、それぞれ寺院内で仕事を見つけて自ら行っており、置かれた状況が各人の役割を生んでいた。このように、寺院は僧侶問わず行き場のない者にとっての避難場所としての役割を担っており、ある種の「移行期間」を過ごす場としての機能を果たしていた。

3.5 信徒による信徒のための「救済」

他者を助ける行為として、「サンケアハツ・トア（仏法による救済）」と呼ばれるものがあり、TL 村でも頻繁に行われていた。まず、病人が出て中々回復しない場合、村の誰かが「サンケアハツ・トア」を行うことを提案し、提案者は人びとへ読経への参加を呼びかけて参加者を募り 3 日間儀礼を開催し読経を行う。そして、4 日目の朝に僧侶を招いて集められた金銭を病人に贈り、病人がその一部を僧侶へ寄進する。誰でも参加可能であるものの、読経という一点に焦点が置かれることから、主に読経が可能な者に声がかけていた。結果として、読経が可能な寺委員会の女性らが多く参加していた。信徒以外にも僧侶が参加し、僧侶も信徒と共に同じ経文を朗読することもあった。読経により功德を積み、積んだ功德を病人とシェアすることで、病人は功德の力によって病気を回復させるという。重篤で死期が近い場合は、来世でよりよい境遇で生まれるように、または地獄に落ちることを防ぐために行われた。これは功德の実践によって病人を「助ける（チュオイ）」行為だと認識されていた。つまり、一見すると個人的で非社会的のようにも思える読経という宗教実践は他者を救済する・支援する社会活動でもあった。

4. 今後の課題

今後の課題を大別すると、(1) 現在収集している情報を整理すること、(2) 本調査で不足している情報を短期調査によって収集すること、(3) 整理した情報を理論によって分析することの 3 つがあげられる。

(1) としては、録音されたデータや収集した膨大な資料を整理していくことが近々の課題である。具体的には、現在全く手つかずの状態である全国・州・郡の僧侶会議の録音データ・関連資料を整理し、政治家や僧侶がどのような発言を公的に行ってきたのかという点について考察したい。これは、現在欠落しているマクロな視点からの分析、すなわち国家が仏教をどのように扱ってきたのか、利用しようとしてきたのかという点を検討する上で非常に重要であると考えている。(2) に関して、自身の反省点であるがスケジュールの立て方に問題があり、時間的制約から村の全世帯調査を行うことができなかった。生活全体を把握し、その中での仏教の位置づけを検証するためにも TL 村の全世帯調査を行いたい。(3) については、先行研究における「社会参加仏教」の概念整理があげられる。カンボジアにおいて「開発僧」という用語は研究者や NGO からの呼称でしかないが、仏教の世俗への積極的関与は見られる。例えば、宗教省では組織改変によって「社会参加仏教」という単語が用いられた部署が設置されているし、会議やワークショップではサンガの大管僧長による世俗への積極的関与を志向する発言がみられた。また、スヴァーイリエン州の「仏教と社会」という団体も「社会」との関わりを意識してその名がつけられたとされる。そのため、「社会参加仏教」という概念について分析していくことが必要であると考えている。先行研究では、上座仏教はその実践が国や地域によって多様であると述べられてきたものの、カンボジアの仏教の観念や実践を丁寧に分析して宗教民族誌を書き上げるという作業はなされてこなかった。それらの積み残された作業を行い、思想としての・生活の中の・制度としての仏教がそれぞれどう絡み合っているのかを読み解いていきたい。その中で寺院や僧侶、ひいては仏教がどのような社会的布置にあるのかを検証し、博士論文としてまとめ上げたい。

5. 留学を終えて

11月のある仏日、寺院の講堂で偶然隣に居合わせた寺委員会の女性からカタン儀礼の誘いを受けた。女性はボル・ポト時代に自分の家族・親族の22名が殺害されたため、殺害された寺院でカタン儀礼を主催し、得られた功德を遺族にシェアするのだと言った。そこでは数千人が殺害されたという。「妹なんかこんなに小さかったんだ」と隣にいた7歳くらいの女の子を指しながら「なんて悲惨なことだ」と続けた。隣にいたおばあさんも話に加わって当時の話で盛り上がった後、「そういう訳なんだよ。私が功德を積む理由は・・・」と述べ涙を流した。いつも明るくふるまう女性が泣く姿をこの時私は初めて見た。このことは「功德を積む」という行為について深く考えさせられる出来事となった。人はなぜ功德を積むのか。それには個人的・群れとしての経験におけるさまざまな理由があり、普段はめったに語ることができない。しかし、数多くの仏教儀礼に参加し、仏日に顔を合わせて共に功德を積む中で、理由の一端に触れることができたのかもしれない。功德を積む理由を語ってくれた人びとの凄まじい経験を思うと今でも涙がこぼれそうになる。

調査当初、かつて現地でNGO職員として開発援助事業に携わった経験をもつ私にとって、人びとの生活の中で「開発」というものがどのように捉えられているのか、ということが最大の謎であった。しかし、住み込み調査を続ける中で、やがてその疑問の焦点は「開発」から「幸福」へとシフトしていった。謎がより大きな範疇になってしまい手に負えない節があるが、仏教儀礼に参加することで人の幸福の所在についてより考えるようになった。借金をしてまで寄進をする女性や熱心に功德を積む男性。彼／彼女らは決して裕福ではないが、儀礼への参加と寄進は欠かせなかった。「来世では今と同じ人生を送りたくないから功德を積んでいる。今は功德が足りないんだ」と語った男性の父はボル・ポト時代に虐殺に加担し、政権崩壊後に怒り狂った村人らのリンチにより殺害され、男性は孤児となった。その経験は本人の口から決して語られることはなかったが、「功德が足りない」と言い、熱心に功德を積むという行為からは彼の辛い過去が透けて見えるように思えた。功德の実践は幸福を得るための切実な行為であり、現在と未来の人生を修正する積極的な方法であった。調査中、私は功德が足りているのだろうかと考えながら人びとと共に功德を積み、自分の人生について顧みる期間でもあった。

突然村にやってきた日本人の私がどれだけ人びとの生活を邪魔してしまったのかは計り知れない。温かく迎えてくれた地域のみなさまに感謝するばかりである。帰国の際、住職やアチャーをはじめ、多くの方々がスヴァーイリエンからはるばるプノンペン空港まで見送りに来てくださったことはいつまでも脳裏に焼き付いている。お世話になった住み込み先のおじいさんとおばあさん、そしていつも私の調査を手助けして下さった寺委員会のトゥーンさんにお礼を申し上げたい。トゥーンさんは私の調査の目的や意図を理解した後、私の調査に関心をもち、いつも調査に同行してくださった。トゥーンさんの人的ネットワークや情報網がなければ、調査をスムーズに行うことができなかった。そして、「自分たちはこうやって調べて記述して残すということをしてこなかった。だから記述して子孫たちに残すことは重要。それを日本人がやってくれている」と言ってくださった。その温かい言葉が強い印象として私の記憶にとどまっており、現在、長期にわたった調査結果をまとめるという困難に直面しながらも、人びとの語りの重み、それを記述することの責任を感じている。今後、研究の成果を何らかの形で人びとに還元できるようにしたいと考えているし、何よりもカンボジアの人びととの関係を大切にしていきたい。

最後に、このような貴重な留学の機会を与えてくださった松下幸之助記念財団の関係者の皆さまに、心より感謝申し上げます。日本とカンボジアの両国に貢献できるよう、今後も研究活動や現地の人びととの交流を続けていきたいと思えます。

6. 留学中の写真



(写真1) MR 寺のカタン儀礼の様子。一行はおどけた人形や楽隊に率いられ、布薩堂の回りを三周練り歩いてから布薩堂に入る。寺院が最も賑やかになる瞬間である。



(写真2) プレイヴェーン州で開催されたカタン儀礼に参加する KK 寺の信徒と報告者。遠方の儀礼に信徒らが申し合わせて共に参加することは珍しい。



(写真3) KK 寺の寺委員会と信徒らの話し合いの様子。購入した死体を運ぶ車両や火葬場の運用に関する話し合いをしていた。中でも、利用料金をめぐって議論が白熱していた。



(写真4) TL 村での儀礼後、主催者からの食事のもてなしに対して返礼のための経文を朗誦する参集者たち。



(写真5) TL 村のサンケアハットア(仏法による救済)の様子。写真前方に横たわる病人のために開催されたが、開催から数日後に亡くなった。



(写真6) 住み込み先の家主との記念写真。おじいさんは出家歴が長く、KK 寺のアチャートム(儀礼を先導する人)を務める。